

特別活動についての一考察

—卒業文集を手がかりに—

A Study on Extracurricular Activities

Based on a School Yearbook

藤井 一 亮*

FUJII Kazuaki

Abstract : Extracurricular activities in the curriculum occupy an important position as various subjects in a senior high school. According to the course of study, the purpose of extracurricular activities is to help students to lead better lives, establish harmonious human relations, and become deeply conscious of what they should be or how they should live through group activities. In a school yearbook, many graduates talk about extracurricular activities as vivid memories in their school days. This is not because they regard their memories as mere nostalgia. It is because their experiences show what they should be at present and in the future. In this study, analyzing the essays by students in a school yearbook, I have examined what kind of activity they remember most clearly and why they remember these activities in their memories. As a result, I have arrived at the conclusion that the differences in their memories derive from to what extent the students were involved in various activities willingly and independently. In order to enhance the extent, teachers should offer a choice by which students are able to participate in extracurricular activities voluntarily and with interest.

Keyword : extracurricular activities, club activities, homeroom activities, a student council, school events

要旨 : 高等学校の特別活動は各教科と並んで、教育課程上、重要な位置を占めている。学習指導要領には、集団活動を通じて、よりよい生活や望ましい人間関係を築き、人間としての生き方・在り方について自覚を深める等の目標が掲げられている。学校時代の思い出として、卒業生が語る具体的な経験の多くは、特別活動についてである。それらが、彼らの記憶にあるということは、単なる郷愁ではなく、その経験が、その者の現在、また将来の生き方・在り方の原点を示し続けているからである。今回、ある高等学校の卒業文集に現れたる思い出を分析し、いかなる活動が明白な記憶として残っているか、あるいは、意識の底に沈んでいるかを調査した。その相違は、生徒が学校生活の中で、自らを受動的な客体としてではなく、能動的な主体として感じられる度合い差によるものと考えられる。この度合いを高める方法としては、生徒が興味を持って、特別活動に自発的に参加できる条件をつくることである。

キーワード : 特別活動、部活動、ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事

* 甲南大学教職教育センター教授

1. はじめに

特別活動は、戦後直後の学校教育の中に、さらに遡れば、戦前の教育の中にも、その前身と考えられる教育内容があり、それらの歴史の中で徐々に一つの領域として整備されてきた。昭和53年の学習指導要領の改訂において、小学校、中学校、高等学校と、その内容の一貫性や関連性を重視するために、高等学校においても、「各教科以外の教育活動」が「特別活動」とその領域名が改められた。現在では、小学校・中学校・高等学校において、「特別活動」は、各教科および総合的な学習の時間と共に教育課程に重要な位置を占めている。

教育課程の中でも教科書を用いてなされる各教科は、どの教科の学習であっても、生徒たちにとっては、その内容が明確であり、他の教科との違いもわかりやすいものである。また、各教科の学習については、様々な学習形態、指導方法が取られるとしても、知識・理解・技能等々にわたる評価については相対的評価、絶対的評価を問わず、多くの場合、定期試験等によらなければならない。そして、その成果・成績の評価は生徒一人ひとりに行われるもので、それを共有することはできない。

これに比すると、特別活動については、学習指導要領において、その目標や内容は全国共通であるが、具体的な指導内容をはじめ指導方法は様々である。

特別活動の特質は、まず、第一に、生徒たちの集団活動である。集団がなければ、特別活動は不可能といっても過言ではない。第二には、集団を基盤に、実践的な活動をその特質とする。実際の生活経験や体験活動による学習、つまり、デューイ流の「なすことによって学ぶ」ことを通して、全人的な人間形成を図るということである。いうならば、特別活動には、生徒が、変化の激しい、また複雑な現代社会のただ中で試

行錯誤を重ねながらも、確固とした、新たな人間関係や社会関係を結びながら、また、一人の人間として、自立し、未来に向かって、たくましく生きていく基礎を培うことが求められている。

この能力を養うために、各学校は生徒の実態に即して、教育課程を編成し、実践している。そして、それを評価しながら絶えざる改善に努めている。ただ、特別活動の評価は教科のそれと違って、集団と個人を常に、総体としてみていかなければならないので、教科とは違った困難を伴うのである。

今までの多くの研究は、どちらかというところ、如何なる活動を計画し実践するか。またそれによって達成すべき目標等について述べられたものや特別活動において教師の役割等について述べられたものが多い⁽¹⁾。もちろん、計画から実践そして結果について、当事者にアンケートをとり、細かい分析を行い、調査しているものもある。ただ、特別活動の範囲は広く、大きいものであるが、一つの活動についての調査に終わっている⁽²⁾。特別活動内の複数の活動についての調査をしているものもあるが、その調査は、現に大学生であり、しかも、教職を目指している大学生が対象であることが多く、現役の一般高校生ではない⁽³⁾。

以上のように、筆者が調べた範囲では、各調査研究が、特別活動の各論、調査期間も短期間に限定されており、特別活動が生徒たちの学校生活全体における位置、またそれらの調査が長期にわたり、その時間的な変化の分析や、またその特別活動の総体に対する提言が少ないように思われる。筆者は、学校生活での特別活動の総体について、現実の生徒が、3年間を通して、何を学び、如何に学び、如何に受容・支持し、かつ生きる力を得てきたのか、つまり、生徒自身が、自分たちが経験してきたところの特別活

動をどのように評価しているかを考え、次に、評価に変化があるのか、また、ないのか等をも探り、その要因をも考えてみたい。それらを踏まえて、今後、一層の創意が求められる特別活動の指導実践に、工夫の一端を提起したい。

2. 研究の方法

特別活動が各教科と同様、教育課程に位置づけられた重要な教育活動であるということは、教育関係者には自明のことであっても、生徒たちに明確に意識化されているとは言い難い。せいぜい、これらも欠席がかさむと進級や卒業に差し障ると考えられている。しかしながら、一方で、卒業直前に自分の学校生活を振り返り、思い出を記すとき、また卒業後、何年か経って当時の印象的なものとして、何が記憶として残っているかと聞かれるとき、修学旅行や文化祭、体育祭等、特別活動に関する内容のものが圧倒的に多いのも、また事実である。

記憶に残っていること、それは単なる郷愁ではなく、その記憶が、その者の現在、また将来の在り方生き方に大きな影響を与え続けているということである。このような観点に立って、筆者は、ある高等学校の「卒業文集」を本研究の資料とした。1984年（昭和59年）創立の本調査高等学校においては、1987（昭和62年）、第1回卒業生以来、20年間（1987～2006）にわたって、卒業生全員が執筆する文集を、毎年、たとえば「百花繚乱」、「櫻梅桃李」等、命名し、発行してきた⁽⁴⁾。

今回、小論をまとめるにあたって、21世紀はじめの6年分（2001～2006）を調査の対象とした。調査対象の文集の始期を2001年（平成13年）においたのは、その年に卒業した生徒が1年生の時に前回の学習指導要領が改訂⁽⁵⁾されており、また当時21世紀の到来ということが話題となっていたので、一つの区切りであるとともに、最終号

（2006年版）にいたる高校生活3年間の2サイクル前にあたるためでもある。

卒業文集における各生徒の文は、各特定の特別活動の後に、感想・随想として編まれたものではなく、3年間にわたる学校での学びや思い出等々である、それ故、その内容は多様・多岐・多方面にわたっている。それらを概括するにあたっては、総てを複数回答的にあげることは困難である。したがって、次に示すような手続きを取って、概括した。

① 概括する項目は、「特別活動」を中心に、「部活動」や「将来の進路・夢」、「その他」とした。

特に、「部活動」は、教育課程上は特別活動に分類されないが、学習指導要領第1章総則の第5款の5の(13)に示されているように、教育的意義が大きく、特別活動との関連が深いと認められているので、項目を立てた。（なお、平成11年12月、文部科学省発行の高等学校学習指導要領解説・特別活動編11頁にも、「これを実施する際には、学校の管理下で計画し実施する教育活動として適切な取り扱いが大切である」と述べられている。）

卒業に当たり、明確に自分の将来を意識しているものを、別に、「将来の進路・夢」として項目を立てた。

② 一人一主題（項目）として取り上げた。

一つの主題（項目）を、与えられたスペース一杯に書き終えているものがある。彼らについての概括・分類は比較的容易である。反面、二つ以上、中には、3年間の全てとはいわないまでも、数種にわたって記しているものもある。これらについては、筆者が生徒の文を慎重に読み、当該生徒にとって一番印象の深いもの、意義あるものを選んだ。その基準は、その生徒にとって最もリアリティに富むものとした。以下に、その例をあげておく。

- ・体育祭・文化祭の思い出を綴っているが、自分が生徒会役員でそれらの行事の裏方として苦勞・工夫したことを記している場合は、生徒会活動の項に分類した。
- ・体育祭・文化祭等、その実践母体はホームルームであるが、委員を除く多数の生徒にとっては、ホームルーム活動と理解しているよりも、直接、学校行事と考えている。換言すれば、多くの生徒はホームルーム活動とは自覚的に捉えていないので、学校行事に分類した。
- ・様々のことを語りながらも、文の一部、2、3行で通訳や、看護師を目指すとか、JRや阪神の鉄道マンになるといったものは、進路・夢の項にいれた。また、潰れそうになった部を再建し、最後の試合で、1勝したといったものは、部活動に分類した。
- ・三年間の思いを網羅的に記述している生徒について、それらがすべて等価値的に感じられるものについては、「その他」に分類した。

3. 分析結果

(1) 特別活動とそれ以外の活動等の関係

2001年～2006年の卒業生全体を見る（図表1）と、「進路・将来・夢」について語った者は、平均すると7.9%である。最も少ない年で5.3%であり、最も多い年でも11.1%であり、経年的に見ても、増加・減少の大きな傾向は見られず、およそ一定であると考えてもよい。これは、卒業を前にして生徒たちの一般的状況と言える。

「部活動」については、2003年が27.4%で、最も高くそれ以後、2006年には13.9%と減少傾向をみせている。これは、学校完全週5日制が定着してきた結果とも考えられる。この頃、休業日となった土曜日・日曜日の連続した部活動（練習試合などを含む）について、生徒たちの

健康の上からも、ひかえる方が望ましいと一般にいられていた。また、平成11年12月、文部科学省発行の高等学校学習指導要領の改訂（この学習指導要領は、平成15年4月1日から年次進行により段階的に適用された）において、それまでは、部活動の参加をもってクラブ活動（これは教育課程の基準としての学習指導要領に示されていた、いわゆる必修クラブのこと）の履修に替えることができると示されていたが、このいわゆる必修クラブが完全に廃止されたことによっても考えられる。つまり、必修クラブによって、部活動へと繋がっていくきっかけの減少とも見える。

「特別活動」について、それを第一にあげた者は、平均を取ってみても、37.8%と、全体の中で最も多い。そしてその傾向も、基本的に増加傾向にある。しかし、よく見ると、2002年と2003年の間には少し断絶があるようである。つまり、その増え方をみると、質的に違っているように見えるのである。というのも、20%台であったが、その後、30%代後半から40%内外で、2006年には50%台に到っている。この理由として考えられるのは、平成10年の中央教育審議会の答申から始まり、平成11年12月、文部科学省発行の高等学校学習指導要領の改訂、平成15年4月1日から年次進行へと続く、いわゆる、生徒の生きる力を育成するために、ゆとりの中で各校が特色ある学校づくりを展開するという流れにしたがって、本調査校も鋭意工夫していると思われる。文集においても、「その他」の項と「特別活動」の項との間に、逆転が起きている。今少し、「その他」の項に表れる事象を紹介してみる。ここには、友人のことをはじめ、先生や家族への感謝、趣味のこと、自分の病気やけがの入院、毎日10数キロの自転車通学、朝の読書、弁当と食堂のこと、ペットの話、琵琶湖を自転車で一周したこと、自分たち双子のこと、

遅刻ばかりで先生に叱られたこと、密かに特定のクラスメートの席の近くに席替えを願望したこと、中には痛ましいことであるが、家族の死などが綴られている。実に様々な経験が語られている。

これら「その他」の項が数の上で、「特別活動」と逆転したということは、「その他」の項の大半を占めている私事にわたるものが減少し、各校に創意工夫が求められる「特別活動」の項へと移ったものと思われる。

(2) 特別活動における3つの活動：ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事の関係

次に、特別活動でくくられる3つの活動、すなわち「ホームルーム活動」、「生徒会活動」、「学校行事」の関係(図表-2)を見ると、「学校行事」を一番に語っている者がすべての年にわたって、90%を超えている。生徒たちにとっては、特別活動とは学校行事と考えているともいえる。日常的なホームルームは時間割の中にも組み込まれ、特別に意識していないようである。また

生徒会活動も、全体的に見ると、直接的には、あまり意識に上っていないと思われる。

しかしながら、「ホームルーム活動」は、生徒たちに意識されているか否かは別にして、学校行事や生徒会活動、学校生活全般にとっての基礎的な単位である。学校行事等への参加や協力および活動の仕方をはじめ、その過程で生じる様々な問題への対処なども、基本的にはホームルームで取り上げられている。そのことを生徒たちは、当然のこととして、特に、あらたまったものとしては考えていない。学校生活における、ある意味においては、無自覚的にまさに、自分のホームと感じられている。それ故、「ホームルーム活動」を1位にあげている者が少ないからといって、この活動が低調ということにはならないのである。では、ホームルームを首位あげる生徒が、6年間で、15名で、平均2.1%であるのかという疑問がだされそうであるが、彼らの文を子細に調べると、それらは、クラスの役員である場合が多い。そして、クラスの成員を一つにまとめていったときの苦勞、そして事

卒業年月および卒業人数	特別活動	部活動	進路・将来・夢	その他
2001(平成13)年 3月.333名	99名 29.7%	69名 20.7%	20名 6.0%	145名 43.5%
2002(平成14)年 3月.346名	98名 28.3%	80名 23.8%	27名 7.8%	141名 40.8%
2003(平成15)年 3月.303名	112名 37.0%	83名 27.4%	16名 5.3%	92名 30.4%
2004(平成16)年 3月.288名	120名 41.4%	64名 22.2%	27名 9.4%	77名 26.7%
2005(平成17)年 3月.307名	120名 39.1%	57名 18.6%	34名 11.1%	96名 31.3%
2006(平成18)年 3月.287名	156名 54.4%	40名 13.9%	23名 8.0%	68名 23.7%
2001~2006 平均 1864名	705名 37.8%	393名 21.1%	147名 7.9%	619名 33. %

図表-1 特別活動とそれ以外の活動等の関係
(小数第2位の四捨五入のため、合計が100%にならないことがある。以下の図表も同様)

後の感謝などが必ず記されている。それ故、この2.1%という数字は、クラスに無自覚的に一体となるのではなく、クラスを客観的な対象、つまり客体として見ることができ、組織力、調整力そして指導力を持った生徒の数と言える。いわば、クラスのリーダーとしての自覚が書かせたもの考えられる。

「生徒会活動」についても、同様のことが言える。特に、「学校行事」と「生徒会活動」は密接な関係にあり、相互に関連しあうものである。生徒たちが自発的、自立的な集団活動を展開するにあたって、リーダーには、全校的な視野にたって、企画力や、調整力、判断力、指導力、そして、いっそうの社会性や責任感が要求される。リーダーには、計画の段階や活動の場面において、教師の指導・示唆をも受けなければならない（もちろん、彼らは、先生方と折衝すると理解しているようである）。このような経験をした者は、具体的に表面に表れた学校行事の体験よりも、彼らの言葉を借りると「裏方」での

困難さやそれをなし終えた充実感、達成感等をより多く語っている。それゆえ、この項に分類される者が見かけ上、多くないとしても、この活動が活発ではないと言えない。より詳しく分析してみると、「ホームルーム活動」と「生徒会活動」について、書き残した生徒（筆者は、彼らをリーダー的存在と考えたのだが）が多くなればなるほど、少なくともこの資料においては、文集全体に対する特別活動の比は高くなっている。

(3) 学校行事における5種類の行事（儀式的行事、文化的行事⁽⁶⁾、健康安全・体育的行事、旅行・集団宿泊的行事、勤労生産・奉仕的行事）の関係

毎年、特別活動のうち、学校行事について語る生徒の数は、図表-2のように、他を圧倒している。今、そのうちの諸行事の関連を見る。

調査期間6年間の内、ほとんどの年で第1位に上げられ、平均を見ても、55.6%と首位に位置づけられるのは、「旅行・集団宿泊的行事」で

卒業年月および 卒業 者 数	ホームルーム活動	生徒会活動	学 校 行 事	全体に対する 特別活動の比 (図表-1) より
2001 (平成13) 年 3月. 99名	0名 0.0%	3名 3.0%	96名 97.0%	29.7%
2002 (平成14) 年 3月. 98名	1名 1.0%	3名 3.1%	94名 96.0%	28.3%
2003 (平成15) 年 3月. 112名	2名 1.8%	5名 4.5%	105名 93.8%	37.0%
2004 (平成16) 年 3月. 120名	3名 2.5%	8名 6.7%	109名 90.8%	41.4%
2005 (平成17) 年 3月. 120名	1名 0.8%	7名 5.8%	112名 93.3%	39.1%
2006 (平成18) 年 3月. 156名	8名 5.6%	4名 2.8%	144名 92.3%	54.4%
2001~2006 平均 705名	15名 2.1%	30名 4.3%	660名 93.6%	37.8%

図表-2 ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事の関係

ある。この行事は、平素と異なる生活環境の中にあつて集団行動を通して自律心を養い、自主的に集団の規律や秩序を守る態度を育成するとともに、自然や文化などに親しむ体験を積むための実際の機会として貴重なものである。生徒たちは、教師や他の生徒と寝食を共にすることによって、生徒と教師、及び生徒相互の人間的な触れ合いや信頼関係の大切さを経験し、生涯の楽しい思い出を作ることともなっている。もちろん、その記述を見てみると、中には、修学旅行中(スキー実習を中心とするものであった)、発熱し、宿舎でずっと寝ていて、実習に参加できなかったというものもある。このことは残念であったが、先生や友人たちが心配してくれたり、気をつかってくれたり、世話をしてくれたこと等を記し、逆にそこから、みんなが経験することができなかったことを経験したと、感謝や今後の生き方を語っている者も少数ではない。

また、本調査校においては、1年次において、「入校時宿泊訓練」等を実施し、入学時の生徒の不安を除き、新しき友人との出会いを準備するとともに、自校へのアイデンティティの醸成に努めている。これに参加することによって、3年間の方向性が決まったと記す者もいる。

次に多く語られているのは、「文化的行事」である。平均を見ると、35%である。20%台から40%台と、比較的多くの者がこの「文化的行事」をあげている。上に記したように、多くのものにとっては、ホームルーム活動というより、学校行事そのものとして、文化祭に取り組み、その成果が実感されている。参加するテーマや具体的な出し物、たとえば、会場入り口(校門)のデコレーション、校舎の壁面(4階から1階)を利用した巨大タペストリや舞台の舞踏・ミュージカル等、自分たちで決定し、取り組んだ中に相互の努力を認め合ったり、協力して完成したりするなか、自分の役割を通して、充実感、

達成感、いうならば、共に生きていく力を実感している。また、ここ「文化的行事」に分類されるものは、文化祭に限られるものではなく、伝統芸能の鑑賞会なども含まれている。たとえば、人間国宝の講談師が演ずる迫真の口演、「立体怪談」の鬼気迫る語り、震え上がった体験などを通じて日本文化に触れた時の感動を生き生きと記している者もいる。

「健康安全・体育的行事」を第1番にあげたものは、4.5%から10.6%で推移している。この行事には、体育的行事として、体育祭、球技大会があげられるが、このほか、健康と安全に関する行事として、健康診断、交通安全を含む安全指導、非常災害の際に備えての避難訓練や防災訓練等が考えられる。学校保健法や消防法に基づいて実施されるものもあるので、調査校においても、年間の行事計画には必ず取り入れられている。しかし、生徒の文集において、分類されるもののほとんどは、体育祭、球技大会であり、他のものが記録として残っていることは少ない。

「儀式的行事」を記したものは、6年間で絶対数で8名、率にして、1.2%である。文集執筆時は卒業生自身の卒業式の前であり、感銘深いものと通常に思われている卒業式そのものについては、時系列的には、記すことが不可能であるが、このことを差し引いても、極めて少数である。本調査校においては、2003(平成15)年11月に、創立20周年の式典を行い、記念事業の一環として、生徒の学習や福利のために利用される同窓会館も建設されている。文集には、この件について、記している者は一人もいない。もちろん、学校をあげての行事であるので、特別に、「創立20周年記念文集」が発行され、その中に、生徒会長の言葉が掲載されている。内容としては、在校生として、この式典に臨めたことの喜びと同窓会館贈呈への感謝等が綴られて

いる⁽⁷⁾。

一般的に学校行事そのものは、基本的に、学校が計画し、実施するものであるが、とりわけ、儀式的な行事はその色が非常に濃く表れるものである。生徒の多くは自らを主体として意識するよりは、ここにおいては客体として感じている場合が多い。

「勤労生産・奉仕的行事」も「儀式的行事」と同じように、卒業を前にして、9名、率にして1.4%のものしか第1位にあげていない。調査校における年間行事予定表をみると、企業見学、高校生触れ合い保育、新島（校区内の人工島）クリーン作戦、町内カントリー作戦（ゴミとしての缶拾い）、高校生地域貢献事業など少なからず「勤労生産・奉仕的行事」も計画されている。けれども、この行事は、他の行事のように、全校が、あげて同日に行うものではない。企業見学の直後の振り返りの文など、その時々には、見学の意義等について語られているものは少なからず存在する⁽⁸⁾が、3年間とした場合はあまり

意識に上っていない。

4. おわりに

上に記した分析結果を踏まえて、特別活動の意味と今後の課題について述べる。

- ① すべての年度の半数以上のものが、記憶において、特別活動および「準」特別活動（部活動）に、肯定的な評価を下している。一般的に、学校時代の思い出として、特別活動をあげる者が多いといわれていることが十分数字的にも理解できる。
- ② 各教科の授業がほぼ大半を占める毎日の生活にあって、特別活動は生徒たちに、喜びを与えている。その喜びも個人だけのものでなく、人と人が協力したときに生まれる連帯感といってもいい、また集団に所属した時の一体感といってもいい、生きる上での、ある種の高揚感を与えている。この感じを抱くと生徒たちは創造的な活動に対して爆発的な力を発揮する。文化祭をあげた者の文章に多くみられるところである。

卒業年月および卒業人数	儀式的行事	文化的行事	健康安全・体育的行事	旅行・集団宿泊的行事	勤労生産・奉仕的行事
2001(平成13)年 3月. 96名	0名 0%	22名 22.9%	6名 6.3%	68名 70.8%	0名 0%
2002(平成14)年 3月. 94名	2名 2.1%	27名 28.7%	10名 10.6%	54名 57.4%	1名 1.1%
2003(平成15)年 3月. 105名	0名 0%	44名 41.9%	9名 8.6%	52名 49.5%	0名 0%
2004(平成16)年 3月. 109名	0名 0%	25名 22.9%	8名 7.3%	73名 67.0%	3名 2.8%
2005(平成17)年 3月. 112名	4名 3.6%	46名 41.1%	5名 4.5%	55名 49.1%	2名 1.8%
2006(平成18)年 3月. 144名	2名 1.4%	67名 46.5%	7名 4.9%	65名 45.1%	3名 2.1%
2001~2006平均 660名	8名 1.2%	231名 35.0%	45名 6.8%	367名 55.6%	9名 1.4%

図表一三 儀式的行事、文化的行事、健康安全・体育的行事、旅行・集団宿泊的行事、勤労生産・奉仕的行事の関係

- ③ 特別活動にしろ、部活動しろ、その中で語られていることは、友人のことが圧倒的に多い。ここに参加することによって、生徒たちは、自分を主張しながらも、自らの感情や衝動を自制することも学んでいる。特に、生徒会やホームルームで中心的な役割を果たした者に多くみられる。
- ④ 文集の中で最も生き生きしたものは、自分たちで相談し、決定し、それにむけて邁進しているものである。その中で、様々な軋轢はあるとしても、それを越えたところにいっそうの喜びを綴っている。そして、自分にはなかった能力を友人の中に発見し、「見直した」と語り、人を尊敬することを学んでいる。
- ⑤ 特別活動において、より多くの者の記憶として定着している学校行事は、教師が、それらの活動後、学年または学校をあげて組織的に振り返りの作業を指導しているものが多いと考えられる。調査校のみならず、いずれの学校においても、修学旅行、文化祭などは、時間をとって振り返りをさせている。別途、その活動だけで文集が編纂されるときもある。それによって、次年度に向けての指導を始めようとしている。教師にも生徒にも、学校をあげての経験の蓄積がなされているものは印象深いものである。事後の振り返りに、大きな意味がある。
- ⑥ 調査校においては、文化的行事と体育的行事を比べると、やや前者に偏りがあるように見える。これは一般的なことではなく、当該校の指導の一つの特色である。体育祭に全校あげての、デコレーションやマスゲーム等を取り入れるようにしているところでは、この比率は変化すると思われる。これについての資料は、今回持たないが、筆者の各学校を巡った経験上、感じるところである。
- ⑦ 健康安全的取り組みは法律にも基づいてお

り、本調査校においても、消防署から出張してもらって、実際の消火活動の実演・指導が学校の重要な行事として位置づけられている。しかしながら、生徒の記憶としては余り定着していない。

かつては多くの学校において、防災訓練・避難訓練は、試験終了後の学期末にすることが慣例であった。しかし、現在では、防災の日とか兵庫県の場合¹、17に行事をもつことが増えてきている。今年(2011)は、東日本大震災、それによる原子力発電所の事故を経験した。これらの経験を生かす学習や訓練活動等が定期的に、臨時的に、また日常的に反復、実施されるように考えなければならない。

- ⑧ 儀式的行事については、生徒が自らを主体として感じる事が、他の行事に比して少なく、厳粛な気分を醸成しようとするれば、「やらされている」という気持ちになる。したがって、他の行事のように、多くの生徒に役割を与えることが必要である。たとえば、卒業式であれば、送辞や答辞等の作成委員会を組織したり、始業式であれば、代表に今学期の計画や決意のスピーチ、また終業式であれば、過ごしてきた学校生活の総括と来学期への展望等のスピーチの機会を与えたりし、儀式が自分たちのものとの実感を持てるようにすることも工夫の一つではないと考える。
- ⑨ ボランティア等の活動も、一部個人的なもの存在するものの、全校を上げてのものは少ない。奉仕活動などを義務づけてもという意見もある⁹⁾が、やはり批判も多い。専門教育を主とする高等学校を除いて、勤労を日常的に取り上げることは、難しいのが現状である。しかし、勤労体験・奉仕の活動は、今後学校現場でも大きな課題となると考えられる。もちろん、その際、生徒の心身の発達や、危機

回避・危機管理など安全に対する学校の姿勢を整備することも問われなければならない。

- ⑩ リーダーという表現は学習指導要領には明示的に表現されていないが、特別活動全般にわたって、リーダーとは何か、その役割とは何かについて、考えさせなければならない。アテナイのペリクレスを出すまでもないが、実のある民主主義を実現させる意味においても極めて重要であると考え。ただ、リーダーを固定的に捉えるのではなく、誰もが交代できる力を付けておくよう指導しなければならないのは当然のことである。

卒業文集、6年間1864名の文章に当たり、各生徒が自分の記憶として首位にあげた主題を、筆者が概括した枠組みに配置し、それを基に特別活動の分析と考察を行った。本文集は、それぞれの活動の直後の振り返りとして書かれたものではない、それゆえ、特定の活動の分析には不向きであるかもしれない。しかし、かえって三年間の学校生活の自由な振り返りになるのではないかと考える。記録ではなく記憶として、彼らは何を大切なものとして学び、卒業していったのか、高等学校現場に長く身を置いた者として、あらためて探ってみた。各教科の学習がその生徒の根や幹となっているとするならば、特別活動は記憶において、その生徒の花となっているのではないかと考える。

註

- (1) ・小野方資「『体験』を重視した学習に基づいた特別活動の問題点—中教審答申・教育課程審議会における『体験』の認識を手がかりに」『福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報』7. 2010年. pp.137~141.
・豊田憲一郎「特別活動に関する一考察

Ⅲ—学級活動の視点から—」『紀要 Visio』39.九州ルーテル学院大学編 2009年. pp.41~50.

- ・末永ひみ子「特別活動における子どもの自主性を育む教師の役割」『工学院大学共通課程研究論叢第46—(1)号』2008年. pp.77~86.
(2) 林 尚示「特別活動における自然体験活動型の集団宿泊活動の役割」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I』第62号,2011年. pp.31~41.
(3) ・松本良夫「学校行事の内容と指導」江川玖成編『特別活動の理論と方法 改訂版』学芸図書株式会社. 2002年. pp.127~129.
・渡辺邦雄、緑川哲夫、桑原憲一編著「特別活動指導法」『日本文教出版』2011年. p.18.
(4) 兵庫県にある公立全日制普通科高等学校。
なお、創立以来20年間にわたる「卒業文集」を快くお貸し頂いた谷本彰子校長先生ならびに執筆された卒業生の皆さんに感謝申し上げます。
(5) 1999年(平成11年)の改訂は、社会や学校の変化に対応した学校教育の推進、学校週5日制下の教育の展開という面から、生徒の「生きる力」の育成を目指した改善が図られるとともに、特別活動の内容の見直しが行われている。なお、今回2009年(平成21年)の改訂は、新たな文言「よりより人間関係」が付け加えられたり、ホームルーム活動・生徒会活動・学校行事の目標が明示されたりしているが、教育課程における位置づけは従来のものを継承している。
(6) 従来「学芸的行事」といわれていたが、今回の学習指導要領の改訂で「文化的行

事」となった。学習指導要領に示されている文言は、前者が「平素の学習活動の成果を総合的に生かし、その向上の意欲を一層高めるような活動を行うこと。」であったが、今回の改訂では「平素の学習活動の成果を総合的に生かし、その向上の意欲を一層高めたり、文化や芸術に親しんだりするような活動を行うこと。」となった。従来から、現場の学校では、「文化や芸術に親しんだりするような活動を」取り入れていたので、この調査の分類は、学芸的行事とせず、文化的行事とした。

- (7) 「創立20周年記念文集」には、その目的からして、予め記述すべき内容の枠、つまり創立に関わることが決められている。書き手も生徒会長が指名されている。したがって、本稿で取り上げる自由記述の卒業文集とは別立てで考えねばならない。それゆえ、敢えて、本文には「一人もいない」と記したのである。

(8) 「私は、工場を見るのは初めてではなかったけれど、改めて大変な仕事場だなと思いました。中に入った時は暑く早く出たいなと思ったけれど、ここで働いている人たちは、そんなことも言わずに働いているのだと思うと、すごいことだなと思いました。」とか、「・・・こんなにも一生懸命できる仕事に巡り会えたらいいなと思いました。」という文が、調査校の「一年の歩み」18号（平成17（2005）年3月31日発行）に掲載されている。

- (9) 教育改革国民会議答申（平成12（2000）年12月22日）では「奉仕活動を全員が行うようにする」と提起されている。期間は、小中学校で2週間、高等学校で1ヶ月とされた。「義務」の表現は避けられているが、事実上は義務化を促していると思われる。なお、学校教育法第31条においては、ボランティア活動等、社会奉仕体験活動などの促進がうたわれている。